Ｒ３．４．１
伊丹市立松崎中学校

# 令和３年度研究推進計画

１　学校教育目標

すべてのことに全力で取り組む生徒の育成
「一生懸命勉強する」「優しい心を持つ」「感動する」生徒の育成

めざす学校像　（１）未来・社会に開かれた学びの場
（２）深い学びと感動がある学びの場
（３）生徒・保護者の思いをくみ取り、温かい人間関係を築く場
（４）三者（学校、家庭、地域）協働による子育ての場

めざす生徒像　（１）学び（授業、行事、部活動）に感動し、人に感動を与えられる生徒
（２）美しいもの、一生懸命な姿に感動する生徒
（３）未来を見据え、主体的に課題を解決する生徒
（４）さわやかな挨拶ができる生徒
（５）学校行事で、しっかり歌って、歩ける生徒
（６）相手を思いやり、自分を大切にする生徒

めざす教師像　（１）授業、行事、部活動で勝負し、生徒とともに感動できる教師
（２）生徒ひとり一人の良さを引き出し、自己有用感をはぐくむ教師
（３）教育のプロとして、絶えず指導方法を改善し、組織力を発揮できる教師
（４）服務規律を順守し常識ある社会人、地域の一員である教師

２　前年度の研究
（１）テーマ

学習の「わかる」「できる」授業の追求
～ふり返りを大切にし、学習意欲を高める授業づくり～

（２）成果と課題
【成果】
・校内研究授業を二学期と三学期に各１回実施した。事後研究を行い、一つの授業について様々な視点で意見交流をすることができた。
・三学期に公開授業週間を実施した。一人一回の公開授業を実施する予定であったが、６月からの７校時４５分授業実施に伴い、授業を一人２回(同教科１回、他教科１回)参観し、アドバイスシートを記入し、提出するよう変更した。参観後に教員同士の授業に関する意見交流もでき、授業改善につながった。
・ＩＣＴ(タブレット)研修を実施した。講師として総合教育センターの指導主事に来ていただき、タブレットの活用の仕方について研修を行った。実際に使ってみることで、授業における今後の活用に向け、意識を高めることができた。
・若手研修を中心とするプチ研(自主研修会)を年間で８回実施した。
【課題】
・学校評価アンケートでは､｢授業は楽しく､わかりやすい｣という問いに肯定的な回答をしている生徒が 31 年度は 78.6 ％であったのに対し、令和２年度は 72.2 ％と、約６ポイント下がっている。「先生はいろいろ工夫して教えてくれる」という問いに肯定的な回答をしている生徒が 31 年度は 89.3 ％であったのに対し、令和２年度は 88.6 ％と、約 0.7 ポイント下がっている。
「授業内容でわかりにくいことについて､先生に質問しやすい｣という問いに肯定的な回答をした生徒が､31 年度は 69.7 ％であったに対し、令和２年度も 66 ％と、約 3.7%下がっている。
・令和２年度は、研修会の時間の確保が難しかった。来年度は、研修が計画的に実施できるように内容や日程を年間を通して、見直す必要がある。
・研究テーマについて、職員の共通理解と課題意識を高める必要がある。
・評価のための「ふり返り」にならないように、生徒の学力向上につながる「ふり返り」の仕方について研修を継続していく。
・ＩＣＴ活用研修を実施し、授業での実践へつなげる。また、家庭学習への活用研究も進める。

３　本年度の研究
（１）テーマ

「できる」「わかる」授業の追求
～ふり返りを大切にし、学習意欲を高める授業づくり～

（２）研究仮説

学力向上　授業のねらいを明確にし、ふり返りを行うことで確かな学力を身につけると、主体的に学ぶことができる。
自己有用感　信頼関係のある学びのなかで、「問い」のある学び合いをつくることで、自己有用感を高めることができる。

（３）テーマ設定の理由

本校の生徒は、何事も一生懸命取り組む生徒が多い。一方、学習面でなかなか結果につながっていないと感じている生徒が多く、自己肯定感が低い。また、昨年度行った学校評価アンケートでは、「自分にはよいところがある」という項目に関しては、肯定的な回答が平成 31 年度 73.2%から 70.5%に下がった。また、学習に関する項目の結果は「授業は楽しく、わかりやすい」（H31　78.6%→ R2　72.2 %）「先生はいろいろ工夫して教えてくれる」（H31　89.3%→ R2　88.6 %）「授業内容でわかりにくいことについて、先生に質問しやすい」（H31 69.7%→ R2 66%）であった。

そこで、生徒自身の自己肯定感を高めるために、自己有用感を高める必要があると考えた。自己有用感は、他者との関わりのなかで高めることができる。他者との関わりをもつためには、信頼関係があり、安心した「学び合い」のある場づくりが必要である。この「学び合い」とは、生徒が教師から教わるだけでなく、生徒同士で教え合い、生徒自身でマスタリー目標（自分の能力を高めるための目標）を定めるなかで、「できる」「わかる」を追求するためにどうしていけばいいのかという「問い」をもつ学びの姿である。その「学び合い」をつくるために、授業のねらいを明確にし、ふり返りを行い、授業改善をする必要がある。以上の考えから、「学力向上について」、「自己有用感について」の二つの仮説を立てた。

昨年度、三学期に校内研修会を行った。講師として、武庫川女子大学　神原一之　教授を招聘し、講話をしていただいた。そこで、「できる」「わかる」「使える」という順番で授業を構築し、主体的な学びにつなげていくという授業のポイントについて助言をいただいた。「できる」は、知っているという状態であり、「わかる」は理解できているという状態である。また、「使える」は、理解した上で自ら活用していく状態である。本校の生徒が、自己有用感を高め、自ら学習に励み、学力向上を図るために、研究テーマを改定した。

（４）具体的な実践内容

①新学習指導要領の趣旨を踏まえた授業
生徒の主体的な学び、対話的な学び、深い学びをめざす（ペア・グループ学習等）。

②本時の目標の明確化とふり返りの場の設定
この授業で何を学ぶか、授業後にどんな力が付いたかを明確に示す。そして、学んだ内容のふり返りの場を設け、評価につなげる。

③ ICT 機器の活用
タブレット等を授業のなかに取り入れ、教師の授業力向上に努める。また、生徒の学習理解を深める支援となるように活用する。

④授業者ならではの「こだわり」の設定
・「できる」「わかる」達成感を実感させる授業
・生徒が「問い」をもてる、学び合いのある授業
・相互に質問したり意見交換できる授業
・個々の生徒に対応した授業
・わかりやすくするためのスモールステップを仕掛けた授業
・個々を認める、褒める場面のある授業
・授業の終わりにふり返り評価する授業

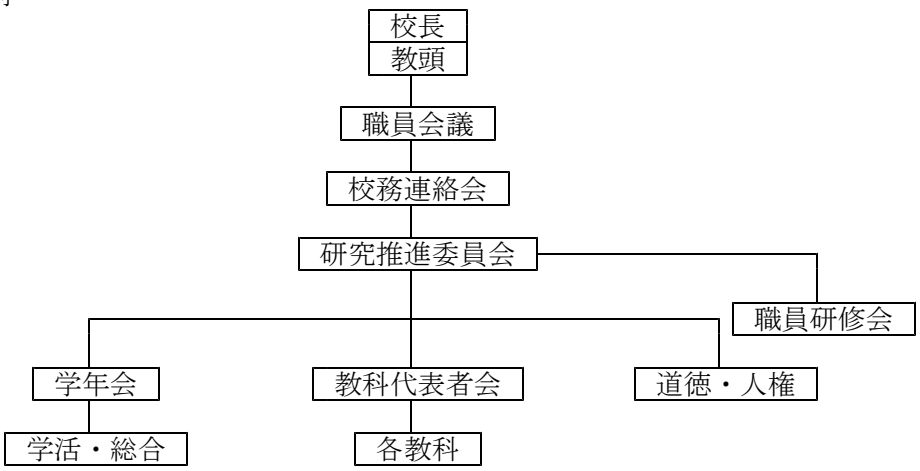
⑤全教師が公開授業を実施
すべての教師が年に1回、授業を公開する。

⑥授業研究会の実施
学期に１回、研究授業と事後研究会を実施し、授業力向上をめざす。

⑦各教科ごとに統一した取り組みの実施
　教科部会を行い、ふり返りの仕方と学習意欲を高める取り組みの共通理解を図り、教科で統一した取り組みを行う。

⑧生徒授業アンケートの実施
　学期ごとに生徒授業アンケートを行い、生徒の意見を参考に授業改善を行う。

（５）研究推進体制




（６）研究推進計画

| 月 | 授業研究会 | 校内研修会 |
|---|---|---|
| ３ | ・研究テーマ、年間研究計画案 | |
| ４ | ・公開授業計画 | ・「学習の手引き」改訂 |
| ５ | ・公開授業実施開始 | ・校内研修会<br>（生徒指導、特別支援教育に関する共通理解）<br>・第１回研究授業指導案事前検討会 |
| ６ | ・ＱＵ実施<br>・第１回研究授業、事後研究会<br>・生徒授業アンケート | ・校内研修会（事後研究会） |
| ７ | | ・夏季研修会計画 |
| ８ | ・幼小中合同研修会<br>・校内研修会 | ・校内研修会（幼小中合同）<br>・校内研修会 |
| １０ | | ・第２回研究授業指導案事前検討会 |
| １１ | ・ＱＵ実施<br>・第２回研究授業、事後研究会<br>・生徒授業アンケート | ・校内研修会（事後研究会） |
| １ | ・第３回研究授業、事後研究会 | ・第３回研究授業指導案事前検討会<br>・校内研修会（事後研究会） |
| ３ | ・今年度のまとめ<br>・来年度の計画 | |

・教科部会（月２回）
・プチ研　（適宜実施予定）